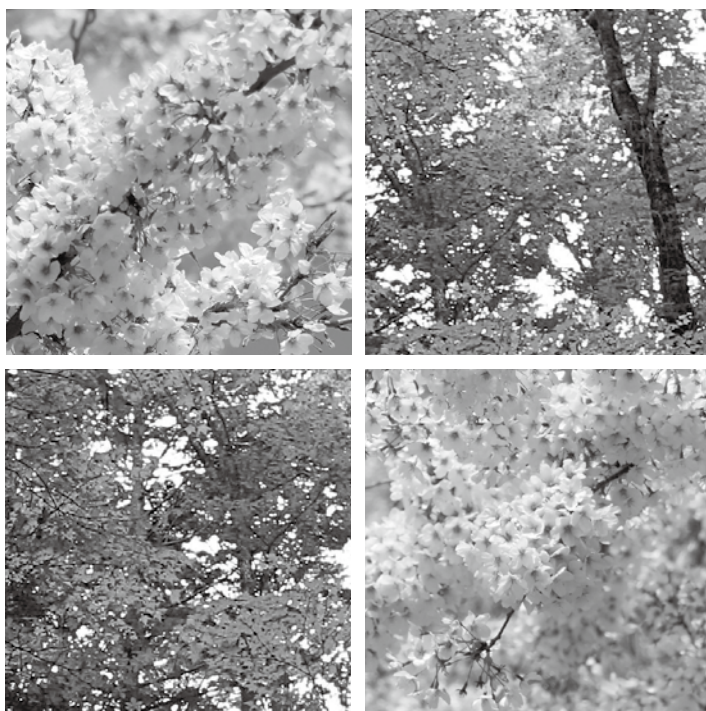




捌書録

高橋新太郎文庫プロジェクト報告

附 学習院女子大図書館 高橋新太郎文庫所蔵リスト(2009年4月)

高橋新太郎文庫

「捌書」とは

高橋新太郎は膨大な書籍類を収集しました。そのごく一部を、雑誌「彷彿月刊」に「集書日誌」として本人が紹介しています。しかし大半の蔵書は未整理で、収集の意図もわからず、管理・分類もされていません。そのため、本人死去の後、収集された蔵書の目的や、目的に照らした整理・分類は不可能な状態となっています。高橋新太郎文庫プロジェクトメンバーの日々の作業は、とにかくその膨大な書籍を「捌いていく」ことにありました。そこで、高橋新太郎の日常が「彷彿」と「集書」であったのなら、プロジェクトメンバーの日々は「捌書」であろうと造語しました。

高橋新太郎 略歴

国文学者・教育者。学習院女子大学名誉教授。
1932年（昭和7年）5月5日生まれ。学習院
大学文学部国文学科卒、同大学院人文科学研究
科修士課程修了。学習院高等科教諭、学習院女
子短期大学（現・学習院女子大学）助教授を経て、
1983年（昭和58年）同大教授。2003年（平
成15年）1月11日没。享年70歳。



創刊号



上段

左) モーターマガジン (1955 年 7 月 25 日。日刊自動車新聞社)

中) モーニング (1982 年 9 月 9 日。講談社)

右) 少年ジャンプ (1968 年 8 月 1 日。集英社)

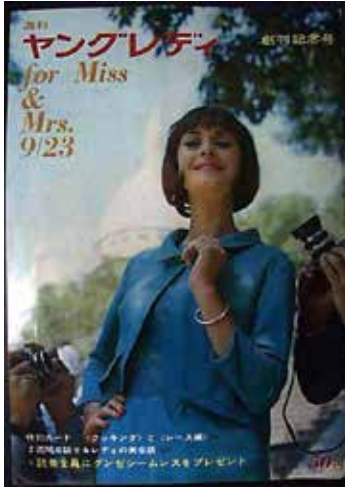
下段

左) 小説新潮 (1947 年 9 月 1 日。新潮社)

中) 週刊文春 (1959 年 4 月 20 日。文藝春秋＝文藝春秋新社)

右) 週刊新潮 (1956 年 2 月 19 日。新潮社)

女性誌



上段

左) ヤングレディ (1963 年 9 月 23 日。講談社)

中) 女性セブン (1963 年 5 月 5 日。小学館)

右) 女性自身 (1958 年 12 月 12 日。光文社)

下段

左) 婦人サロン (1929 年 9 月 1 日。文藝春秋=文藝春秋社)

中) 新婦人 (1946 年 5 月 1 日。自由公論社)

右) 淑女画報 (1913 年 3 月 1 日。博文館)

一般資料



上段

- 左) 世界 (1946 年 8 月 1 日。岩波書店)
中) 中央公論 (1912 年 7 月 1 日。反省社＝中央公論新社)
右) 平凡 (1946 年 10 月 5 日。凡人社＝マガジンハウス)

下段

- 左) 改造 (1922 年 4 月 1 日。改造社)
中) 朝日ジャーナル (1962 年 1 月 7 日。朝日新聞社)
右) 週刊朝日 (1922 年 4 月 2 日。朝日新聞社)

高橋新太郎文庫の取り組みに寄せて

義父・高橋新太郎が亡くなったのは2003年1月11日のことです。あれから、早6年半の歳月が経過しました。前年の春に、余命幾許もないと告げられ、本人も家族も覚悟していたとは言え、入院、死去、葬儀、そしてその後の後始末と実に大変でした。

その大変な後始末の一つには、故人の遺した膨大な数の蔵書がありました。故人が長年にわたり全国の書店、古書店から買い集めた書物は、自宅の書斎や書庫はもちろん、居間や台所まで所狭しと積み上げられており、また、大学の個人研究室に詰め込まれたものを合わせると、その数は6万冊とも7万冊とも見積もられました。私たちは、この「本の山」の前で、まさに呆然とするしかありませんでした。

故人の遺した蔵書類は、周囲の研究者や出版社の方々に伺ったところ、特定のジャンルで括することはできず、収集者である故人だけしか、それぞれの書物や資料を収集した意図、その関連性がわからないだろうということでした。しかし、故人がそれらをもとに、大学を定年退職したのちに何らかの書を著わすつもりであったということは、私たち家族も含めた周囲の多くが知っていました。

故人がその余生を打ち込む仕事としようとし、しかも果たせなかった「何か」のための蔵書類を、ただ古書店等に売却処分するのは忍びない……だからといって、このままにすることもできない。そう思い悩んでいるときに、故人と私との共通の知人である中川順一氏から、ホームページ上のコレクション「高橋新太郎文庫」を作りたいという申し入れがありました。膨大な数の蔵書類は、いずれは処分するしか方法がないとしても、故人が一体どのようなものを収集していたのか、それを把握してみたいということでした。そして、そうすることで、故人が生前お世話になった学界の方や後進の研究者の方々に役に立つものも発見できるのではないかと。それはまさに、私の思いそのものであり、遺族として可能な限りの協力をするとお伝えしました。

そのような経緯で始まった高橋新太郎文庫の取り組みでしたが、作業経過の報告を受けるたびに、その試みが大変なものであることを知らされ、また、ある意味で「終わりのない作業」ではないかという思いさえしていました。しかし幸いなことに、「高橋新太郎文庫」プロジェクトの取り組みは多くの方々の知るところとなり、その結果、学習院女子大学・永井和子学長をはじめ多くの方々のご理解とご支援もいただくこととなりました。そして蔵書類の一切は散逸することなく、学習院女子大学と尾道大学とにお引き受けいただくこととなったわけです。

「高橋新太郎文庫」のプロジェクトは、蔵書自体が両大学に寄贈されたのちも、ホームページ上の更新や両大学においての整理作業が続けられると聞いていました。故人が収集したものが後世に遺り、多くの研究者らによってさらにその価値が高められることになれば、遺族として大変喜ばしいと思っていたところ、今般、学習院女子大学より、寄贈した故人の蔵書が同大学図書館の「コレクション」として整理され、広く一般に公開されることとなったとの連絡を受けました。故人の「後片付けも」も一区切

りがついたように思えましたので、「高橋新太郎文庫」プロジェクトの皆さんが整理し、学習院女子大図書館が公開した蔵書リストを、ここにファイリングした冊子を制作いたしました。何年かあとに、プロジェクトについて振り返るときの記録として遺すことも、目的の一つです。

前述したとおり、このプロジェクトは多くの方々のご理解とご協力により進めることができました。とくに、故人と私ども家族とが長年にわたりお世話になっている永井和子先生をはじめ学習院女子大の先生方、職員の皆様方には、故人の没後もまだお手を煩わすことになったことを申し訳なく思いますとともに、深く感謝を申し上げます。また、プロジェクトメンバーと周囲の協力者の皆様方への感謝を改めて申し上げ、本冊子の巻頭の言葉に代えさせていただきます。

平成 21 年 8 月 31 日

園木 章夫

(富士鋳油グループ代表)

目次

p.03

高橋新太郎 略歴

p.04

書籍写真 創刊号／女性誌／一般資料

p.07

高橋新太郎文庫の取り組みに寄せて

富士鋳油グループ代表 園木章夫

p.09

目次

p.10

富士鋳油グループと高橋新太郎文庫

p.11

諏訪書庫からの報告

高橋新太郎文庫 事務局 中川順一

p.15

「残す」ことへの夢想

高橋新太郎文庫 事務局 松村 良

p.17

高橋新太郎文庫学習院女子大学所蔵リスト

富士鋁油グループと高橋新太郎文庫

■高橋新太郎文庫とは

国文学者の故・高橋新太郎学習院女子大学名誉教授（1932 - 2003）の蔵書が、学習院女子大学図書館で整理され、「高橋新太郎文庫」として2009年7月から公開されています。

同文庫は、高橋教授が自らの研究のため、全国の古書店をまわり、さまざまなジャンルの書籍や文献を収集し、さらに膨大な新刊書や雑誌を書店から買い求めた結果、「近代文学など既成のジャンルで区分・整理することが困難」とされるほどの資料群となったものです。



人形町富士ビル搬入直後。2003年4月頃

■高橋新太郎文庫プロジェクトの発足

高橋教授は富士鋁油・園木社長の岳父で、国文学研究のほか、広辞苑の編纂や文芸用語集の執筆や監修者としても著名であり、秋篠宮殿下の恩師の一人として教育者としても有名です。2003年1月に死去されましたが、死後、その膨大な蔵書類の散逸を惜しむ人々の手により「高橋新太郎文庫」のプロジェクトが立ち上がり、整理保存が進められています。プロジェクトメンバーは園木社長のほか、高橋教授と旧知の中川順一氏（富士鋁油グループの広報アドバイザー）らが名を連ね、その後、日本近代文学館・十川信介副理事長の推薦により高橋教授の教え子の松村良氏（駒澤女子大学講師）が加わり、蔵書目録作成とそのホームページ掲載の実務作業を進めてきました。

■富士鋁油グループの文化事業

富士鋁油グループでは企業の社会貢献活動の一環として、プロジェクトの支援を行いました。一時期、整理作業は同グループ人形町富士ビルでも行われており、学習院女子大学・永井和子学長をはじめ多くのプロジェクト協力者や研究者、出版関係者らが蔵書類の閲覧に訪れていました。

6万冊とも7万冊とも言われた蔵書類は、現在、学習院女子大学と広島県立尾道大学とに寄贈され管理保存されています。今回一般公開されたのは、このうち、学習院女子大学図書館に寄贈された戦前・戦後の「雑誌の創刊号コレクション」や「女性誌コレクション」などで、プロジェクトは発足後6年余にして、まずは一区切りしたこととなります。

人形町富士ビルでの作業



●学習院女子大学図書館ホームページ 高橋新太郎文庫

<http://www2.gwc.gakushuin.ac.jp/library/search/collection.html>

●高橋新太郎文庫ホームページ

<http://www.noracom.co.jp/takahashi/index.html>

諏訪書庫からの報告

高橋新太郎文庫 事務局 中川 順一

高橋新太郎文庫の進捗について 2009 年 7 月末現在の状況を、プロジェクトの事務局として報告します。

「高橋新太郎文庫」のプロジェクトは、日本近代文学とその時代の研究に資するために、故・高橋新太郎の業績と蔵書、収集資料目録を記録することを当初の目的としていました。その立ち上げ経緯については、『高橋新太郎文庫』の取り組み」（彷彿月刊 2004 年 10 月号。13 ページに再録）に記載したとおりです。

学習院女子大学の個人研究室の書籍を搬出し、人形町富士ビルの地階（後に、同ビル 6 階に移動）に搬入したのが 2003 年 2 月、次いで、東京都中野区沼袋の故人の自宅にあった膨大な書籍類の移動を完了したのは同年 5 月過ぎのことでした。それから約 2 年以上の期間、整理の方向性もつかめぬまま、まずは資料価値として貴重であろうと判断した雑誌創刊号や、故人の研究分野の一つであった戦後の社会風俗を知る手掛かりとなる雑誌資料等のピックアップなどを行いつつ、ホームページの公開を行ってきました。

ホームページには研究者のほか、マスコミ関係などからの取材ソースとしての資料請求も数多く寄せられ、故人の蔵書の「価値」が伺えました。

2004 年からは、故人の教え子でもある国文学研究者・松村良氏がプロジェクトに加わりました。松村良氏には、プロジェクトの進捗や分類作業の精度向上に多大な貢献をしていただきました。また、その頃からは、蔵書分類についての方針を定めるとともに、「最終着地点」として、書籍の一括寄贈先の検討を行ってきました。

その後、学習院女子大学・永井和子学長、尾道大学・和佐谷維昭教授、同・柴市郎准教授ら多くの方々のご尽力により、およそ 7 万冊の蔵書について、学習院女子大学図書館と尾道大学による引き受けが決定し、2005 年 12 月に、高橋新太郎の遺族である園木家から両大学に蔵書の一切が寄贈されました。

学習院女子大においては、2006 年 4 月より 2009 年 3 月までの 3 年間にわたり、同大学学芸員実習室等に仮保管された蔵書類の分類と目録作成作業を行いました。それらは最終的に、学習院大学図書館の「コレクション」として学内外に下記のように発表されました。

（学習院女子大学ホームページ 2009 年 6 月 19 日）

高橋新太郎文庫

本文庫は、国文学者の故・高橋新太郎学習院女子大学名誉教授（1932 - 2003）のご遺族より寄贈された資料をもとに開設されました。

高橋先生が自らの研究のため、全国の古書店をまわり、さまざまなジャンルの書籍や文献を収集し、さらに膨大な新刊書や雑誌を書店から買い求めた結果、「近代文学など既成のジャンルで区分・整理することが困難」とされるほどの資料群となりました。

戦前・戦後に刊行された『雑誌の創刊号コレクション』や『女性誌コレクション』など異彩を放つ内容となっています。

また、同大学に所蔵された蔵書については、以下のように利用されることとなりました。

(学習院女子大学ホームページ 2009 年 7 月 1 日)

●高橋新太郎文庫の閲覧方法について

本学名誉教授で国文学者の故・高橋新太郎先生（1932 - 2003）のご遺族より寄贈された資料をもとに開設された当文庫について、所蔵リストをホームページに掲載して、利用に供することになりました。

当文庫では、雑誌の『創刊号コレクション』や『女性誌コレクション』など異彩を放つ資料を垣間見ることができます。次の利用方法をご確認の上、ご利用ください。

- ①利用者は前日までに当館の閲覧カウンターへ申し込みをしてください。（★資料の利用は館内閲覧に限られます）
- ②申し込みの際には、HP に掲載されている所蔵リストを参照の上、閲覧を希望する『資料名（タイトル名&巻号）』と『箱番号』をご指定ください。
- ③学外の方は、「利用案内（外部の方）の閲覧手続き」を行なってください。
- ④複写の申し込みは原則可能ですが、資料の保存状態や紙質の劣化状態によってはお断りする場合があります。次の URL をクリックしてください。

<http://www2.gwc.gakushuin.ac.jp/library/search/collection.html>

高橋新太郎文庫の「価値」をどのようにとらえるかは、プロジェクト発足時から議論のあったところでした。蔵書のそれぞれにどのような「価値」があるのか、ということだけでなく、プロジェクトの長い取り組みの中で、この作業そのものに果たして「価値」はあるのだろうかという疑問さえも生じました。しかしながら、今回、作業の一つの区切りとして、学習院女子大学図書館が上記のように整理し、広く一般への公開に踏み切ってくださったことは、「少なくともそれだけの『価値』はある」と証明されたと安堵しています。

今後の取り組みとしては、初期の蔵書リストのまま掲載されている「高橋新太郎文庫ホームページ」の情報の整理と更新、尾道大学の取り組みの進捗確認と学習院女子大学データベースとのリンクなどが必要かと考えられます。しかしそれらはいずれも、これまでと同等以上の労力が予想されますので、ボランティアのプロジェクトとして可能なことのみについて選択的に対応していく考えです。

なお、プロジェクトの進捗の中で、必要に迫られて「書庫」を賃借しました。両大学への寄贈からこぼれた資料や未整理の遺品類の保管と仕分けのための作業場です。2005 年 9 月に借りたこの作業場は、事務局である私の事務所（ノラ・コミュニケーションズ）と、この時期からの主な作業場となった学習院女子大学の間接地点である新宿区高田馬場 1 丁目のマンションの 1 階で、駐車場を改装し事務所にした物件です。この界限は、昔「諏訪町」と呼ばれており、マンション名にもそれが冠されていたので、私たちはここを「諏訪書庫」と呼びました。

プロジェクトが一定程度完了し、作業場は不要になりました。しかし、諏訪書庫は現在も存在しています。私の事務所の分室として、書籍や資料の保管と打ち合わせスペースとして使用しています。当社の出版物のブランド「諏訪書房」「諏訪書房新書」もこの書庫から生まれました。故・高橋新太郎先生の大きな写真が飾られた諏訪書庫は、かつての故人の研究室同様、書物に溢れた乱雑な部屋ですが、近所の野良猫たちが集まる、妙に心落ち着くスペースとなっていることも、あわせてご報告いたします。

以上

「高橋新太郎文庫」の取り組み

(2004/09/01「彷彿月刊」2004年10月号 掲載)

「高橋新太郎文庫」事務局 中川 順一

収集家にとって意味あるものが、第三者にとっては無意味な、ときに存在それ自体がコストとなる場合がある。しかし、収集家にとっての不幸は、収集家である彼が考える「意味」に無知な人間たちが、「存在それ自体がコスト」と認定することではない。収集家は、収集の時点ですでに、それが「第三者にとっては無意味な、ときに存在それ自体がコスト」と認定されるであろうことに、ある程度の覚悟と決意は、ある。収集家にとっての真の不幸は、たとえ彼の収集の意味には無知であっても、彼を愛するが故に彼が慈しんだものを、「存在それ自体コスト」と言い切れぬまま持て余す姿を知ることだろう。



諏訪書庫

我らが愛する故・高橋新太郎は、心優しい人だから、彼の収集の「意味」に無知な我々が、段ボール箱で約2,500箱、推定約7万冊の書籍という彼の収集物の前で悄然とする姿を見れば、「もういいよ。捨ててしまいなさい」と言うだろう。けれども我々の不幸は、高橋新太郎は故人となってしまう、もう彼から直接に、「捨ててしまいなさい」と言ってもらえないところにある。あるいはそれが、心優しいふりをして生きた高橋新太郎の「作戦」だったかもしれない。「高橋新太郎文庫」を担う我々の作業は、愛する高橋新太郎から、もう絶対に「捨ててしまいなさい」と言ってもらうことはない膨大な「蔵書」を引き受け、悄然とし、けれども意地になって、「持て余してはいません!」と言い切るための取り組みなのである。

そして、「なのである」と紋切り型に宣言せざるを得ないほどに、実は、持て余しているのである。

※

「高橋新太郎文庫」はホームページ上の文庫である。「日本近代文学とその時代の研究に資することを目的に、国文学者・高橋新太郎（学習院女子大学名誉教授・2003年1月11日没）の業績と蔵書、収集資料目録をweb上に記録する」ために運営している。

発端は、新太郎先生（私は、そう呼んでいた）の死去により学習院女子大学個人研究室（書棚ばかりでなく机、椅子、床にもうず高く本が積まれ、もはや研究室としての用をなさなくなっていた）の明け渡しが必要になり、あわせて自宅地下に作られた書庫と、自宅（書斎だけでなく居間や台所にまで）に集められた膨大な蔵書類の「始末」をどうすべきかに関係者が頭を悩ませたところにあった。「彷彿月刊」の読者であればご存知のとおり、高橋新太郎は全国の古書店をまわり、さまざまなジャンルの書籍や文献を収集した。そして、それ以上に膨大な新刊書籍・雑誌を書店から買い求めていた。



諏訪書庫を訪問した猫

新太郎先生の周囲の者で、文学や研究や古書収集に縁のない者たちは、「ただ処分するのは惜しい」という思いから、新太郎先生の長女・芳さんと、その夫君である園木章夫氏に蔵書の整理を申し入れた。

当初、半年間で整理し、書名程度の目録を作成し、それをインターネット上に掲載しようという考えでスタートした。「何を集めていたか」だけでも記録されれば、後は寄贈や古書店を介しての市場への還元、あるいは廃棄といったさまざまな選択肢のどれを

選ぶこともできるだろうと判断した。しかしこの判断は、いかにも素人のそれであることがやがて判明する。蔵書の収容と整理作業は、日本橋人形町の園木氏の経営する会社のビルの一室（1フロア占拠！）を利用しているが、作業後1年8ヶ月を経過した今でも、蔵書リスト作成は遅々として進まず、関係者は「途方にくれている」状態である。整理状況および雑誌創刊号や全集など一部のリストはホームページをご覧いただきたい。また遅々として進めぬリスト化を補うために、「彷彿月刊」に連載された本人の集書をもとにした連載「集書日誌」も収録した。整理後の処置については、正直「手付かずのまま」である。処置に関する、現実的で好意ある提案を求めてやまない。



町名の由来である譚訪神社

作業を行う我々は、新太郎先生を「収集家」と呼んでいるが、学習院女子大学で近代日本文学を教えていた高橋新太郎を知る人からは、「先生は収集家ではなく研究者である」と叱られる。「研究のために必要となるであろう本や雑誌をとりあえず収集していたのである」と説明を受ける。しかし、それを理解したとしても、段ボール約2,500箱に詰め替えた膨大な書籍や文献（この中には古新聞や切抜き、ポスターやチラシ類も含まれる）は、「近代文学」など既成のジャンルで区分・整理することは困難で、本人亡きいまは「集めていた」としか表現のしようがないものである。

医師から余命わずかとの宣告を受けた新太郎先生は、残された命として「あと300日欲しい」と言った。その日数で最後の卒業生を送り出し定年退任を迎え、3作の本を仕上げたいと周囲に語った。一つは随想集「杜と櫻並木の蔭で」であり、これは本人の原稿と学習院を中心とした関係者の方々に追悼文を執筆していただき、今年七月、学習院女子大学教授・永井和子氏と長女・園木芳氏の編集により笠間書院から出版された。（『杜と櫻並木の蔭で』は非売品として出版されているが、ご希望の方には頒布しているので、笠間書院または高橋文庫までご連絡を）

そして生前果たせなかったあとの2作は、一つは研究論文集「近代日本文学の圏」であり、もう一つが、おそらく収集した書籍や文献をもとに構成されたであろう「昭和貼交帖～思想と文化の相克」である。後者は、新太郎先生の膨大な蔵書・文献・図版類の中から、高橋新太郎自身が必要なものを抽出し、それを意味付けし、世の中に提示するもののはずだった。本人からその構想を聞かされた方の話によれば、膨大な蔵書・文献・図版類をもとに、「それを鳥瞰図的に昭和の意味を根源的に問い直すはずだった」という。

けれども新太郎先生は、「第一頁に（『ロシア革命十周年記念祭』のポスター）」というメモのほかは、一行の原稿も、整理軸も残さぬままに逝った。

「高橋新太郎文庫」の取り組みは、「何を集めていたのか」を記録するだけの作業である。けれども、新太郎先生が遺したかった「昭和貼交帖」を誰かが引き受けてくれるときの「引継ぎ書」の一つにはなるはずだと考え、遺族の理解に甘え、さらに遺族に大きな負担を強いながら継続している。

◎高橋新太郎文庫

<http://www.noracom.co.jp/takahashi/index.html>



「残す」ことへの夢想

松村 良

今から5年前の2004年6月9日に、学習院大学の十川信介先生の推挙で高橋新太郎文庫の整理を担当することになった私は、午後2時に人形町の富士鋳油のビルを訪れた。中川順一氏にお会いした後、新太郎先生の蔵書が置いてあるという6階のフロアへ足を運んだ。「おそろしい数のダンボール箱あり」と当時の日記には書いてある。ワンフロア丸ごと蔵書置き場と化していた。その後、富士鋳油の塚田脩常務や、総務の方々とお会いして、翌日からさっそく雑誌の整理を始めた。

水曜と木曜は人形町で整理作業をやり、その合間に学習院大学図書館で新太郎先生が「彷徨月刊」に連載した「集書日誌」のコピーを取ったりした。7月下旬からは松井（旧姓弘海）玲順さんがアルバイトで来るようになった。他にもアルバイトの人は何人もいたが、松井さんには2009年3月の作業完了時まで、断続的に雑誌の整理やリスト入力作業等をずっと手伝ってもらった。

一年後、2005年の夏になっても、整理作業は終わらなかった。最終的な「処分」をどうするかが深刻な問題になっていたが、尾道大学の柴市郎氏からの提案で、学習院女子大学に主に古い雑誌を寄贈し、残りの書籍・雑誌は尾道市に寄贈するということになり、2005年秋から冬にかけてその準備に明け暮れた。12月に全ての蔵書を人形町から学習院女子大学へ運び、2月末に尾道へ大型トラックで輸送することが決まった。やっと「落ち着き先」が見つかって安堵した記憶がある。尾道への輸送後、廃校となった小学校にとりあえず保管されることとなった新太郎先生の蔵書を、2006年3月19日から21日にかけて中川氏と共に視察に行った。尾道大学の松浦学長、和佐谷先生、楨林先生、総務課長の阪井氏とお会いして、今後の高橋新太郎文庫の整理保存と活用をお願いした。



女子大作業場（搬入直後。2006年3月）



保管先となった尾道市郊外の廃校



尾道大寄贈分の保管

2006年4月からは、学習院女子大学に寄贈された雑誌の再分類とリスト作成を引き続き行うことになった。この作業は平原温子さん（当時東京学芸大学大学院生）が十進分類法に基づく分類項目を設定してくれたことにより、以前よりもわかりやすい形で分類することができた。2006年春から2009年春まで、3年かかってようやく学習院女子大学所蔵分の蔵書リストをパソコンに入力し、それと並行して雑誌の脱酸処理や、保存用の中性



女子大での作業風景

紙箱への入れ替えを行った。2009年3月16日に学習院女子大学図書館に蔵書リストデータが入ったCD-Rを提出して、5年近くかかった高橋新太郎文庫の整理事業は私の手を離れた。

友人の柴市郎氏の尽力により、新太郎先生の蔵書は尾道大学と学習院女子大学とで分割される形で後世に保存されることになった。もし、このような幸運がなければ、蔵書の大部分は古書店に売却され、古書市場へ還流されていただろう。それはごく普通の出来事であり、中川氏もしばしば「ネット上に蔵書目録が残ればそれでいい」と言っていた。たまたま私がこのプロジェクトに関わったことが契機となって、私自身の力ではなく、幾つもの偶然と幸運が重なり合って、今日の結果をもたらしたことに、何らかの運命的な力を感じなくもない。

私が夢想するのは、22世紀の学生たちが、20世紀の日本人の文化や風俗を調べるために、この高橋新太郎文庫を活用する日が来るのではないかと、ということである。その頃には、日本近代文学研究者という存在は、江戸時代の儒学者のような過去の遺物と成り果てているのかもしれない。それでも、新太郎先生が人生の大半を費やして集めた蔵書を「残せた」ことで、先生の「書物への情熱」が未来へと伝わっていく可能性があるのではないだろうか。

図書館への納品形態





高橋新太郎文庫 学習院女子大学所蔵リスト

次ページ以下のリストは、学習院女子大学図書館が2009年7月1日付でホームページに公開した「高橋新太郎文庫蔵書リスト」である。このリストは、高橋新太郎文庫プロジェクトが作成し、2009年3月16日に学習院女子大学図書館に提出した、故・高橋新太郎の遺族から学習院女子大学図書館に寄贈された書籍等の目録（寄贈蔵書リスト）をもとに作成されたものである。